

白鯨

映画文学人生論

Herman Melville *Moby Dick* (1851)

邦訳：田中西二郎訳『白鯨』(1952)「新潮文庫」

映画：1956年公開

監督：ジョン・ヒューストン

出演：エイハブ グレゴリー・ペック

イシュメール リチャード・ベースハート

もしあの二重に閉鎖された国、日本が、外人を迎えることがありとすれば・・・

ハーマン・メルヴィルの『白鯨』が英米両国で発行されたのは一八五一年。ペルーの黒船が来航して天下泰平の民の夢をやぶったのはその二年後である。

もしあの二重に閉鎖された国、日本が、外人を迎えることがありとすれば、その功績を負はしめらるべきものもまた、捕鯨船のほかにはない。それは今日すでにかの国の扉口に近づいてすらいるのだ。

たしかに捕鯨船の功績は大きいのが、鎖国日本の錠をこじ開けるために払った犠牲とその後遺症のために払った犠牲を考えると功罪半ばと言わざるをえない。エイハブ船長はモービー・デイクと呼ばれる白鯨に日本沖で片脚を奪われ、復讐のために出漁したピークオド号の乗組員は、語り手イシュメールをのぞく全員が海の藻屑となった。

すべては壊え滅び、大いなる海の枢衣は、五千年前と同じうねりをうねりつづけたが、根本的な疑問は解明されない、そもそも、いったいなぜ白鯨は日本沖に出没したのか、そして、なぜペルーの黒船は日本に来航して鎖国日本の錠をこじ開けることによって、日米戦争をひき起こす遠因をつくらなければならなかったのか。



白鯨

映画文学人生論

ピークオド号は南西の方から台湾とバシー諸島とをさして進んだ。この両者のあいだに、シナ海から太平洋に流れ出る熱帯の海流が横たわっている。エイハブ船長が東洋の諸群島の地図を拡げて白鯨の行方を占うとき、もう一枚の地図は日本列島——ニフオン、マツマイ、シコケ（本州、北海道、四国）等の長大な東海岸を示していた。

イギリスの捕鯨船サミュエル・エンダービー号から白鯨モービー・デイクの情報もたらされた。ロンドンの捕鯨家サミュエル・エンダービー父子商会の船だ。船長は白鯨のために片腕を失ったが、エイハブとちがって、復讐しようという一念は抱いていない。

エンダービー家は一七七五年に抹香鯨狩りをはじめて以来の名門で、一八一九年には、日本沖の漁場に進出してはじめて試験的漁業を行ったというが、旧約聖書の時代にはさかのぼれない。

エイハブもイシュメールも旧約聖書の登場人物に由来する名前だ。鯨の腹の中に呑みこまれたヨナはエイハブと血がつながっている。

旧約聖書の時代、日本列島には縄文人が住んでいたが、文字を知らない縄文人は旧約聖書には登場しない。この国では『万葉集』や『古事記』にはじめて鯨という文字が使われたことは神ならぬ『白鯨』の作者の知る由もないことだった。

菜の花や鯨もよらず海暮ぬ

蕪村